

承認と親密性をめぐる政治

—植民地主義的視点から—

池田 緑*

要 約

現代における男性による女性支配は、《ファルス》を通じて行われている。異性愛主義は女性にメランコリーを発生させ、それを埋め合わせるために《ファルス》への欲望を女性に植えつける。《ファルス》に同化しようとする女性は、性的な親密性を経ることによってさらに男性の支配を支えることになる。本稿では、承認と親密性との間で展開される政治の諸相を、《ファルス》という視点から検討する。

1. 本稿の性格と目的

本稿は、2つの性格をもっている。1つ目は、「承認の政治における男性権力—モノガミーと性愛の植民地主義への基礎的考察—」（池田，2008）で採りあげたテーマ、すなわち女性に対する他者承認（他者による承認）を軸とした権力関係を再考することである。池田（2008）での基本的な問題意識は、社会で活躍している女性においても（そうでない女性においてはなおさらのこと）、女性として男性に承認される欲求が彼女らを激しく突き動かし、社会的成功という業績原理と、男性に選ばれるという女性原理の間で引き裂かれてしまうのはなぜか、というものであった。なぜならば、そのロジックを詳細に検討しないかぎり、たとえ女性が公的領域において男性と同等に社会的な成功を取めるようになって、男性の私的領域を基盤とした権力性・優位性は温存されるからである。

その際に注目したのは、他者承認（他者による承認）をめぐる政治であった。私は他者承認を人格的承認、社会的承認、性的承認の3種に便宜上区分し、女性たちは男性に人格的承認を求めて親密性を構築しようとするが、実際には男性たちから与えられるのは性的承認のみである構造を、ホモ・ソーシャリティという概念を補助的に使用しつつ論じた（池田，2008：44-46）¹⁾。

またその過程で、男性による女性の支配には植民地主義（colonialism）と近似した諸点があることも指摘した。池田（2008）とそれに続く「親密性の権力と植民地主義—性愛と権力にかんする基礎的考察—」（池田，2009）では、植民地主義、とくに制度としての植民地支配が終結した後も、心的領域（心的傾向）を中心に支配が継続している状態としてのポストコロニアリズムという概念を導入することにより、両性間の政治問題を「ポストコロニアルな男女関係」として再定義した²⁾。そこでは、承認をめぐる政治がモノガミー

*大妻女子大学 社会情報学部

と深く結び付いて展開されている状況を、モノガミーの対立概念としての大杉栄による「多角恋愛」という概念を検討することを通じて考えた。

しかしながらそれらの過程で、議論の流れや紙幅の関係でいくつか十分に論じられなかった論点が残った。男性による女性支配はなにをめぐってなされているのかという焦点、人格的承認と性的承認が男性支配に活用される契機と手法、他者承認が親密性と結びついた結果として女性の自立を阻害するロジック、等である。また、これらの男性権力が、男性間のホモソーシャルな関係性においていかに連携されているか、という点も十分に論じられていなかった点である。

本稿では、これらの諸点を順次論じてゆく。その意味で本稿は、第一義的に池田（2008）および池田（2009）での議論を補完するという性格を持ち、また直接的な追記でもある。そのため、本稿を読み進める前に池田（2008）および池田（2009）を参照していただきたい。また、そのような補完性・追記性のため、独立した論文としてはやや統一性を欠く側面もあると思われるが、ここまで述べたような本稿の性格の要求の結果であることを承知いただきたい。

ただし、これらの諸点を検討することはまた、男性による権力行使の痕跡を辿ることでもある。ジュディス・バトラーは『ジェンダー・トラブル』の中で、

フェミニズム批評は同時に、フェミニズムの主体である「女」というカテゴリーが、解放を模索するまさにその権力構造によってどのように生産され、また制約を受けているかを理解しなければならない。(Butler, 1990 = 1999 : 21)

と述べているが、男性による、とくに親密性の領域における権力行使の痕跡を辿ることは上記のバトラーの問題意識に共鳴するものでもある。バトラーの問題意識は、いうまでもなく女性という性的カテゴリーの構築性にかんしての言及ではあるが、多くの女性たちにとって、また男性たちに

とつても、権力実践の場である親密性の領域においてどのような政治が行われているのかを考えることは、女性というカテゴリーそのものの構築性を再考することにもなるだろう。

いずれにしろ、本稿、および本稿に先立つ池田（2008, 2009）は、私自身が日々接している女子学生たちが、女性の社会進出や活躍の在り方、あるいはジェンダー論・女性学全般、あるいは女性解放への理解と意志を示しても、こと親密性にかかわる問題となると、驚くほどの“脆弱さ”を示す点、言い換えれば、頭では女性の自立や自身のライフプランを描きながらも、対男性の親密性においては、ほとんど真逆とも思える行動を取りがちになってしまうのはなぜか、という問題意識に基づいている。その問題は、未だ就業していない（公的領域に本格的に進出していない）女子学生のみならず、社会で活躍している多くの女性においても垣間見られるものであることは言うまでもない。本稿のみでその解決策を示す事は、もとより過大で不可能な企てではあるが、そのような“脆弱さ”がどのような男性権力によって準備されるのか、そのロジックの一端を探ることは、意義があると考ええる。

最後に、本稿の2つ目の性格は、私自身の日常的な教育活動において使用することが想定されている点である。私が担当する授業科目において、本稿を女子大学学部生の参照に供することが予定されている。そのため、ジェンダー論・女性学の成果として定着していると思われる一部の事項、また池田（2008）においてすでに論じた点も文脈によっては再度言及することになるが、その部分は読者として想定されている学生たちの理解のためであることを、あらかじめ断っておきたい。

2. 「悪女」とは誰か？

最初に、男性の女性支配は、どのような点をめぐって行われているのか、その焦点について考えてみたい。

「悪女」という言葉がある。この言葉から連想

される歴史上の人物としてよく採りあげられるのは、たとえば、クレオパトラ、ポンパドール夫人、ド・ブランヴィリエ侯爵夫人、カトリーヌ・ド・メディシス、則天武(后)、西太后、エカテリーナⅡ世、北条政子、日野富子、江青、等である³⁾。彼女らに共通したイメージは、“男勝り”の政治力と権力へのアクセス、決断力、あるいは残忍さ、といった、近代社会において男性のみが備えることを許されると考えられてきた資質を備えた女性であるという点であろう。

ところで、この「悪女」という言葉ほど、男性による女性支配の欲望の在り方を反語的かつ端的に示している言葉も少ないだろう。結論から言えば、彼女らが「悪」とされるのは、男性の支配権に服していないという一点においてである。“男勝り”の政治力や決断力は、ドメスティック・イデオロギーにそぐわない気質であり、男性間のホモ・ソーシャルな秩序への攪乱である。近代社会において男性の領域とされてきた公的領域に、私的領域化されたはずの女性が進出し、ときに男性以上の決定権と影響力を行使した事例は、字義通り男性の社会的権力への彼女らによる侵犯と受け取られ、それを指して「悪」という名称が付与されていると考えられる。

また残忍さ（これこそ彼女らが「悪女」と命名されるに至った大きな気質ともなっている）も、近代社会において女性に課せられてきた「母性」や「女らしさ」から類推可能な、優しさや平和主義、消極性と相反する気質である。さらに、上に列挙した女性たちはいずれも歴史上に名をとどめている人物であるから、彼女ら自身にはある程度の資産があり、経済的自立も可能な存在であった。これまた、ロマンティック・ラブとドメスティック・イデオロギーの複合的作用としての近代婚姻制度下での男性への女性の経済的従属、というシステムの原則に反する存在である。

田中貴子は悪女の条件として、第一にどんなかたちであれ権力を掌握するか、権力者の周辺において自身が権力に関与することができること、第二に必ず男性との関係において彼女の価値が計られていること、を挙げている（田中, 1992: 7）。す

なわち、歴史上の「悪女」とは、彼女らの歴史的・政治的功績のいかんにかかわらず、公的領域における活動、経済的状況において、男性によるコントロールが効かない人物、反逆した人物、無視した人物を指す名称であるといってもよいだろう。

それは、「良女」なる言葉が存在していないことから類推可能である。「良女」とは、男性がコントロール可能な女性であり、男性による女性支配のコードに従順な女性であり、男性権力が近代社会において確立した後は、すなわち「普通の女性」のことであった。それゆえにわざわざ「良女」という言語カテゴリーは存在する必要がなかったのである。フーコーらの指摘を待つまでもなく、おそらくは近代国民国家社会において排除すべきカテゴリーとして「悪女」が設定され、その対立概念として「正常＝普通の女」は形作られていったと考えるべきであろう。

また、「悪女」という概念が男性の女性への支配権と結びついているということは、「悪男／良男」という言語カテゴリーの欠落からも明らかである。「悪男／良男」という言葉については、その指し示す内容すら最大公約数的に想像することが困難である。公的領域において女性のコントロールを受けない男性を「悪男」とするならば、多くの男性は「悪男」であり、一方で公的領域の活動を女性の指示下で行うような男性は決して「良男」とは呼ばれない。むしろ自立心の欠如が欠点とされ、「女の尻にひかれたダメ男」、「マザコン」等の否定的評価がもっぱら下されるだろう。

先に参照した田中貴子も、「悪男」なる概念の欠落は、男性中心社会の中で女性の思考や言語までも男性のそれを使用せざるをえなかったために、女性の側から男を計る尺度が成立しなかったことと関係していると指摘している（田中, 1992: 11）。この「悪女／良女」と「悪男／良男」の言語カテゴリー上の不均衡（そもそも「悪女」以外は事実上存在しない言葉ではあるが）は、そのまま近代社会における男性と女性との間における支配権の不均衡を表している。

しかし考えてみると、この支配権の不均衡はなにも公的領域に限定されたものではない。たとえ

ば「悪女」の一形態として、「ファム・ファタル (femme fatale)」という言葉が西洋文化圏には存在してきた。このフランス語を直訳すれば「運命 (宿命) の女」という意味であるが、ファタルという語には「致命的・命取りの」というニュアンスも含まれており、鹿島茂によれば「ファム・ファタル」とは「破滅することがわかっていながら、いや、へたをすれば命さえ危ないと承知していてもなお、男が恋にのめりこんでいかざるをえないような、そんな魔性の魅力をもった女」という (鹿島, 2003:10)。

鹿島は、西洋文学史上の「ファム・ファタル」の造形の典型として、『マノン・レスコー』、『カルメン』、『フレデリックとベルヌレット』のベルヌレット、『椿姫』のヴィオレッタ、等を挙げている。しかしこの場合、マノンも、カルメンも、ベルヌレットも、ヴィオレッタも、必ずしも経済的自立を果たしている女性ではない点に注意が必要である。マノンやベルヌレットはまだ父親の庇護下にある「小娘」であり、カルメンはタバコ工場で働く低賃金労働者であり“ジプシー”の流民である⁴⁾。またヴィオレッタは高級「娼婦」であり、男性の「援助・庇護」の下に生活する人物である。

むしろ彼女らに共通している点は、経済的自立という側面ではなく、精神的な自立、とくに性的自立を獲得している (獲得しようと志している) 女性であるという点である。物語では、性的な決定権を男性に移譲しない彼女らをめぐって、男が振り回され、やがて破滅してゆく。デ・グリュウは嫉妬心からマノンの犯罪の片棒を担ぎ新大陸に追放され、ドン・ホセはカルメンの色仕掛けで職を失い犯罪に手を染め、カルメンの新たな恋人への嫉妬から彼女を殺す。

それらの物語の中で彼女らを形作る気質は、恋における自由奔放さ、とくに性的な奔放さとして特徴づけられている。一時は一途に男を愛しても、やがて新たな恋を求めて他の男性とも性的な関係を結んでゆくカルメンがその典型であるといえる。

「悪女」の一類型である「ファム・ファタル」

が、性的な自決権を中心に命名されているということは、「悪女」という概念が公的な領域のみならず私的な領域にかかわる概念であることを示している。すなわち「悪女」とは、公的領域において男性と競合する可能性をもつ女性のみならず、私的領域において男性の性的コントロール圏から逸脱する存在をも含む概念であるといえる。つまり男にとっての「女の悪」とは、公的領域であれ、私的領域であれ、男性にとってアンコントロールな存在であることの、別名なのである。

ここで再度、「悪女」という命名から類推される男性の女性支配の欲望について整理しよう。そのような整理が、男性権力の女性に対する欲望を明確に示してくれるであろう。それは第1に、公的領域における男性との競合性に対する命名である。この点はホモ・ソーシャルという概念と深く関連している。ホモ・ソーシャルリティ (Homo-Sociality) とは、セジウィックによる概念で、男性同士が緊密な社会的関係を結ぶ際に、そのような親密性が近代社会において禁止されている同性愛 (Homo-Sexuality) ときわめて近似しているために、女性を外部化、性的対象化し排除することにより、男性間の社会的関係を安定化させるシステムである (Sedgwick, 1985=2001)。その過程で同性愛嫌悪 (ホモフォビア) とミソジニー (女性嫌悪) が発達するという。

女性を外部化するとは、すなわち公的領域を男性の領域とし、そこから女性を排除し私的な存在とすること (私化=privatization) であり、ホモ・ソーシャルリティこそ、近代社会のドメスティック・イデオロギーの制度的基盤であるといえる。すなわち、“男勝り”に政治的・社会的に影響力を行使する女性は、その存在そのものがホモ・ソーシャルリティへの明示的な異質者であり、男性権力の基盤を崩しかねない存在である。すなわち、男性権力にとって「悪」なのである。古くは女性参政権獲得運動や近年の女性の社会進出に対して、啓蒙思想や「法の下での平等」といった人権思想のロジックからそれらを“許容”しつつも、どこかで不満や反発を感じる男性が多く存在し続けてきた理由は、ここに求められるだろう。

公的領域での活動への欲望は、男性にのみ許され、男性のみが独占し、その欲望を女性が持つことは、すなわち男性権力への干渉、侵犯と映ってきたのである。

第2に、私的領域における女性支配の欲望について考える。この領域におけるコントロール権は、とくに性的関係を含む親密性の問題として立ち現れる。そしてこの問題にもホモ・ソーシャリティが深くかかわっている。この領域は、男性権力といった、ある意味では集合的、抽象的な利益とは異なり、その男性個人の権力性とかかわっている。ホモ・ソーシャルな関係性に男性個人が参加するためには、自身が女性を性的対象とすることを表明し合わなくてはならない。その最も明確な証明とされたものは、配偶者なり恋人なりの特定の女性とモノガミ的（単婚的）な関係を結ぶことである。したがって、公的領域において他の男性と臆することなく、思いのままに活動するためには、男性個人にとって特定の配偶者なり恋人をもつことが、男性個人にとって端的に必要なことである。

そしてその対象となる女性は、自分に対して忠誠（とくに性的な意味において）を尽くすものでなければならず、純潔性や場合によっては処女性までが求められた。対象となる女性が、その男性以外の男性と性的な関係をもつことは、当該男性のホモ・ソーシャルな参加基盤を揺るがせるものであり、女性への管轄権（それはホモ・ソーシャルな関係を成り立たせている基盤でもある）の実効性を疑わせる事態であるからだ。すなわち、自分とモノガミな関係にある女性が他の男性と性的関係をもつことは、自分自身のホモ・ソーシャリティへの参加資格を突き崩しかねない事態でもあるのだ。これは、その男性個人に対しての「悪」である。

それゆえに男性個人は、私的領域における管轄権、とくに性的な管轄権をめぐって、ときには致命的ともいえるような激しい行動に駆り立てられる。このことは、男性の女性支配への欲望の契機が、公的領域以上に、私的領域における支配にきわめて強く存在していることを示している。公的

領域における女性の欲望は、その抵触がホモ・ソーシャリティといった集合的な利益であるのに対して、私的領域における女性の欲望は、その男性個人の利益そのものを脅かす存在だからである。西洋文学史上、「ファム・ファタル」達に魅入られた男たちの多くが、致命的な激情に駆られたのも、それへの反応のひとつの類型であるだろう。考えてみれば、先に列挙した歴史上における「悪女」達もまた、公的な領域における権力者であると同時に、その何人かは性的に男性の管轄権を逸脱している存在でもあった。逆に言えば、彼女らが「悪女」であるためには、私的領域においても自立した存在である必要があった。

田中貴子はこの点について、近代社会では女性の性は出産と快楽との二極に分裂したために、女性の性が男性の統制を離れて自己主張することは、男性を「誘惑」し「破滅」に導く恐ろしいものに、男性の認識上において転化したと指摘している（田中、1992：218）。したがって、男性にとって、それを防ぐためには、女性の性的自立への欲望を徹底的に封殺する必要があった。「個人的なことは政治的である」というラディカル・フェミニズムの有名なテーゼは、この間の事情を見事に言い当てていたといえるだろう。それに先立って、リベラル・フェミニズムは制度の平等、言い換えれば公的領域における平等を掲げてその運動を参政権獲得に集約してゆき、それは一定程度は実現した。しかしそれでもなお、両性間の不平等や差別は解消しなかったという前提から出発した第二波フェミニズムは、男女不平等の重要な制度的基盤として私的領域に焦点を当てた。なかでも、ラディカル・フェミニストが「ベッドの中の政治」を問題化し、とくに性の解放を女性解放の重要なメルクマール（判断の指標）として設定したことは、今考え直しても慧眼であったといえる。

近代社会に生きる男性たちにとって、彼ら自身にとって最も緊急度の高いプロジェクトのひとつは、女性たちの公私にわたる欲望をコントロールすること、とくに私的領域における性的な欲望をコントロールすることであったといえる。「悪

女」というカテゴリーは、女性の欲望のアンコントロールな状態（男性にとって）を指し示す語であり、女性の欲望への心的傾向を表現した言葉でもある。それは、男性にとっての「悪」とは何かをわかりやすく指し示し、規範化する概念でもあった。

3. 《ファルス》と承認の契機

では、男性がコントロールしようとする女性の欲望とは具体的になんだろうか。それはここまでの議論において明らかなように、女性の独立心であり女性の欲望そのものである。そして、そのような女性の欲望は依存心と表裏一体の関係にある。女性の独立心は、それが公的領域であれ私的領域であれ、何らかの欠落と深く結び付いていると考えられてきたからである。

すでに池田（2008）において論じたことだが、多くの女性が希求しているものは社会的承認以上に、人格的承認である。男女共同参画社会になり、たとえ名目上ではあっても、女性が社会に進出し、場合によっては男性以上の公的領域での活躍を行うケースも珍しくはなくなってきた。たとえ少数ではあっても男性に伍して働く女性も存在するようになり、実際、私の教えてきた学生の中にも、男子学生がうらやむような会社に総合職で就職した女子学生も少なくはない。しかし、それでもなお、彼女らには未達成感や成功不安が付きまとっていると感じる時がある。これは公的領域における社会的承認のみでは、彼女らの欠落を完全には埋めることが難しいという可能性を示している。池田（2008）でも検討した桐野夏生の小説『グロテスク』は、この間の事情を詳細に描いていた（桐野，2006a, 2006b）。有名大学を卒業し一流と呼ばれる会社に就職した登場人物が、やがて女性としての、より精確に言えば人格の承認を求めて“売春婦”となってゆく過程は、女性たちが共通に抱える人格的承認への欲求をよく描いていた。

もちろん、このような公的領域において十分な社会的承認を得られる女性はまだ数少ないだろ

う。それはいまだに女性の平均賃金が男性のそれと比べて約65%前後で推移していること、また多くの企業社会が依然男性中心に動いていることを考えれば理解できる⁵⁾。ましてや、多くの女性たちは公的領域において男性に伍して働いているわけでもなく、そのような活躍を期待すらされていない。そのような彼女たちにとって、社会的承認を得られないということは自明の前提であり、承認は人格的なものをめぐっての欲望に収斂しがちとなるだろう。

ここで考えてみる必要があるのは、彼女らが求めている人格的承認とは、そもそもどのようなもので、どのような契機で発生するものなのか、という点である。その根源的な発生過程は女性一般に共有されているメランコリーにあると思われる。小倉千加子は、ジェンダー・カテゴリーにおける女性の特徴を論じた中で、自立欲求の抑制と自己肯定感および自尊感情の低さを挙げている（小倉，2001：22）。これらの特徴は、女性の精神的自立を妨げるものであり、女性が自らのアイデンティティを構築する上での大きな障害となるものである。それらの特徴は、女性たちにとっては大きな欠落を意味し、同種の欠落は男性にはほとんど見られないものである。

この点は池田（2008：50-52）においてすでに論じたが、重要な点なので再度考えたい。ジュディス・バトラーは、フロイトのメランコリーという概念を批判的に再解釈し、母への愛の忘却が異性愛としてのメランコリーを産出すると論じた（Butler, 1990=1999：56-65）。メランコリーとは、何を失ったのかわからず、それどころかときには「失った」ことさえ全く気付いていない状態を指している。メランコリー症の人は、喪失を「克服」して受容する代わりに、喪失した対象に自らを同一化させることによって、それを自我に取り込むという反応を見せる傾向があるという（Salih, 2002=2005：96）。バトラーの複雑な議論を明快に整理したサラ・サリーによると、メランコリックな異性愛制度は、母親に向けられた「女兒」の欲望を近親姦タブーによって禁止し、「女兒」にメランコリーを産出する。さらに体内

化を通じた母親との同一化が進む過程で、「女児」の同性愛的欲望は否定され女性性が獲得・内面化される。その結果、メランコリックな異性愛が成立する、という (Salih, 2002=2005:101)。

すなわち、多くの女性に共有されている自尊心・自己肯定感の低さや未達成感は、母の喪失による空洞が埋め合わされずに放置されていることが大きな原因となっていると考えられるのである (池田, 2008:50)。それはいうまでもなく、異性愛システムの帰結であり、制度的なものである。そしてラカンによれば、その空洞は言語化された父性、「父の法」によって埋め合わされる。この「父の法」こそ、後に《ファルス》としてバトラーが問題としたものであった (池田, 2008:50)。

《ファルス》の諸相については池田 (2008) を参照していただくとして、ここで確認しておかなければならないのは、《ファルス》とは、「ある身体器官すなわち身体の一部を幻想によって書き換えたもの」であり、《ファルス》はペニスの象徴であって、ペニスそのものではないということである (Butler, 1993:81; Salih, 2002=2005:152)⁶⁾。それは、ペニスに象徴される／収斂する／あるいは類推されるものではあるが、ペニスそのものではなく、権力である。そしてこの権力が身体的器官としてのペニスそのものときわめて混同されやすいことが、女性にとっては事態をややこしくし、男性にとっては女性支配を容易にしている。

言葉を変えて言うならば、多くの女性たちが求めてやまない人格的承認とは、《ファルス》を獲得することの別名であるかもしれないのだ。そのことが男女間の親密性と権力における大きな焦点である。しかし、この点にはより注意を要する。本当に女性たちが求めているのは、《ファルス》の権力であるのかは、留保が必要な問題である。この点については、後ほど第6節で再び考えたい。

ところで、この《ファルス》はどのような経緯を経て女性たちに欲望されるのであろうか。自尊心・自己肯定感の低さはメランコリーによって

産出され、それを埋め合わせるものへの欲望をうみだす。一方で男性たちの中にはホモ・ソーシャルな政治が存在している。ホモ・ソーシャルな政治においては、女性を性的対象として外部化しているがゆえに、男性間において女性の獲得競争が発生している。そのような競合関係においては、ホモ・ソサイエティに参加している他の男性が欲望するような女性こそ、ホモ・ソサイエティにおける競争の戦利品として価値をもつ。すなわち他の男性の欲望こそが、男性自身の欲望と化するのである。そのようなホモ・ソサイエティにおける女性に対する欲望の基準、そこに参加している大多数の男性に共有されている女性の序列化の基準こそ「美」と名付けられているものに他ならない。このロジックによって、女性に対しては「美」が要求されることになる。「美」はホモ・ソーシャルな欲望が産出した女性に対する命令である。言い換えれば「美しくあれ」ということは、《ファルス》が女性たちに命令する“法”でもある。

それゆえに、《ファルス》に一步でも近づこうと考える女性の多くは、自らの「美」に磨きをかけることに執心することになる。しかしそれは同時に、「美」をめぐる競争関係を女性間にうみだし、女性から連帯の可能性と社会性を奪う一翼を担うことになる。しかしながらこの競争関係は、男性間における女性獲得競争とは質を異にしている。男性間のホモ・ソーシャルな競争は基本的には公的領域における社会的威信の競争であり、女性の獲得はその制度的基盤であり、ときには“戦利品”と位置づけられる。より多く「美」を備えた女性を獲得することは社会的威信の帰結であり、原則的には公的領域における達成度と比例したものと受け取られる傾向がある。それに対して、女性同士の「美」の競争は、「美」そのものが競争の基準ともなっているため、競争の目的と基準が同一であるという困難さに直面せざるをえない。男性間のホモソーシャルな関係では、競争の基準は公的領域における威信の達成度であり、「美」の体現者である女性の獲得はあくまでも副次的 (ただし重要なホモ・ソシヤリティの基盤ではあるが) であるのに対して、女性の場合は

「美」を獲得することそのものが、重要な競争となる。

一方で、近代社会のドメスティック・イデオロギーによって私的存在化 (privatization) されてきた女性には、無償労働が求められてきた。この無償労働は、不払い労働 (unpaid work) として問題化されてきたものである。いうまでもなく不払い労働を正当化するロジックは「愛」であった。すなわち「愛」あるがゆえに献身するというストーリーが近代の私的領域においては一般化され、家事労働を中心とした維持労働に対価が付くことはなかった。それが「愛」の発露であるならば、そこに対価は不要であるからだ。

しかし考えてみれば、「愛」とは、つねに労働や犠牲によって計測される概念である。たとえば、どれほど我が子を精神的に「愛して」いると思っている母親でも、家事が不得手であったり多忙であったりして三食を外食やコンビニの弁当で済ませていけば、世間的には母親失格の烙印を押されるだろう。母親が母親たるための条件としては、子供への「愛」が必要であり、その「愛」は、炊事や身の回りの世話といった、具体的な労働によって (のみ) 評価されるのである。かように、「愛」という概念には具体的な労働の提供や献身、あるいは貨幣を通じて労働に換算可能なものによって計測されるという特徴がある。

しかも、多くの場合、「愛」は母性や「女性性」と本質主義的に関連付けられて言説化されている。あたかも、近代社会において女性とは「愛担当係」であるかのようである。その送り先は、いうまでもなく男性個人や男性社会の利益である。換言すれば、女性は、「愛」という名の下に、男性個人や男性社会に対して一方的に労働や献身の提供を求められる存在であるといえる。それが、ドメスティック・イデオロギーの制度的な基盤ともなってきた。

しかしながら、この「愛」の一方通行にかんしてただ一つの例外がある。それは性愛 (sexual-love) である。性愛にかんしてのみは、その発動主体は男性であるとされてきた。それは、ホモ・ソーシャリティにおける“戦利品”として女性が

男性たちの競合関係の外部におかれてきたことに起因する。女性には、すべからず男性に“所有される”ことが求められ、その“所有”とは、排他的な性的関係を特定の男性との間に継続的に結ぶことによって明示化される性質のものであった。これが制度化されたものが近代の婚姻である。つまり、「美」によって評価される女性がいずれかの男性の“モノ”になる (= “所有される”) という事態は、その当該男性との性的接触によって完結するのである。

ここに「愛」にかんする不均衡が発生する。男性が発動するのはただ一種類の「愛」である性愛であるのに対して、女性はその交換のために発動しなくてはならないのは、性愛以外のすべての種類の「愛」である。この「愛=労働や献身」の不均衡が、男女間の私的領域における権力の不均衡の源泉の一つであるといえる。そしてこの秩序を乱すような女性の欲望は厳しく糾弾される。女性の公的領域における社会進出の欲望、さらには私的領域における性的自立の欲望がより激しく罰せられるのは第2節で「悪女」の例を通してみたとおりである。すなわち、女性は、男性の性愛を受けるために、それ以外のすべての「愛」にかんする労働を一方的に捧げることが求められるのである。

この「愛」をめぐる不均衡な構造は、「美」を経由し、女性たちが《ファルス》に到達しようとする欲望を狡猾に利用したものだといえる。逆に言えば、「美」と性愛を経由しない《ファルス》への途は、男性たちによって注意深く、しかも厳密に封鎖されているということでもある。したがって、多くの女性たちにとって、人格的に承認を得ることは、性的な回路を通じて、性的な承認を得ることと、みかけ上同義であるか、あるいはきわめて区分が困難な事態にたち至ってしまう。そしてそれこそが、男性個人と男性社会の利益にとっては狙い目となっているのだ。

4. 《ファルス》と親密性

そのような性的承認は、いうまでもなく男女の

親密な関係において男性によって“授与”される。親密性と労働は「愛」という概念を介して表裏一体の関係にある。多くの女性たちは、男性に排他的な性的関係を維持してもらうために、多くの無償労働を捧げることになる。どうしてそこまでの事態に至ってしまうのだろうか。

第1の理由は、《ファルス》への渴望がひき起こす劣等コンプレックスが考えられる。異性愛制度においてメランコリーを背負わされた女性にとって、その埋め合わせは《ファルス》に接近すること、《ファルス》に同化することによって可能なのではないかと錯誤されやすい。この点は、植民地主義分析において、フランツ・ファノンやエドワード・サイード、近くは沖縄で野村浩らが徹底的に問題とした劣等コンプレックスという概念を用いると理解しやすいだろう。

植民地の原住民は、本国の文化的諸価値を自分の価値とすればするだけジャングルの奥から抜け出たことになる。皮膚の黒さ、未開状態を否定すればするだけ、白人に近くなる。

(Fanon, 1951=1998: 40-41)。

劣等コンプレックスは、被植民者の精神に無力感という感情を発生させることによって、自立を想像する力さえも奪いとってしまうのだ。自立できなければ、助けてくれる者に依存するほかないだろう。そして、助けてもらいたければ、従順になるしかないだろう。— (中略) —その結果、被植民者は、植民者を畏怖すると同時にありがたがる感覚を植えつけられるのだ。— (中略) —劣等コンプレックスは、このように、植民者とその文化に対する被植民者の偏愛を起動させる。(野村, 2005: 89-90)

アルジェリアや沖縄への植民地支配についての文脈で書かれたこれらの記述は、「文化」を《ファルス》と読みかえれば、そのまま男女間の支配権力の記述ともなりうる。《ファルス》への渴望は、その結果として、それを持たざる自分

身に自己嫌悪とミソジニーを植えつけ、劣等コンプレックスをひき起こし、さらには同様に《ファルス》を持たない他の女性への軽蔑をひき起こす。

池田(2008)において、私はもっとも強く父権的価値観を内面化した女性を「父の娘」として再定義した(池田, 2008: 51)。父親に憧れ、父の期待に応えようとし、その父親の期待が業績原理(たとえば学校の成績)であるなら業績原理にいそしみ、それが女性原理(女らしくあれ)であるなら女性原理を体現化しようとするような存在である。そして彼女らは、あたかも父の視線を内面化したかのように他の女性たちを眺め、父と父権が内包するミソジニーすら再生産することもある。ようするに、父の気に入った娘になることによって、具体的かつ個別的な父の《ファルス》を体内化しようとする「よい子(娘)」である⁷⁾。

いわば、この「父の娘」は劣等コンプレックスを強烈に植えつけられた存在であるといえる。ある意味で抽象的・集合的な《ファルス》ではなく、具体的な父親という男性存在に付随した《ファルス》を通じて、抽象的な《ファルス》への欲望を体現せざるを得なかった「父の娘」たちは、その経験が個人的であればあるほど、《ファルス》への渴望は構造的・制度的なものではなく、個人的なものとして認識される。しかし考えてみるならば、この「父の娘」が経験している《ファルス》への渴望は、すべての女性にとって程度の違いこそあれ共有されている問題であることが理解できるだろう。すべての女性には父親が存在しており、たとえ父親が特定不可能な場合であっても、《ファルス》を代替する身近な男性や、あるいは《ファルス》を代弁する存在・伝達者としての母親等の大人たちがいるからである。

すなわち、劣等コンプレックスが、欠落としての《ファルス》への渴望と出会ったとき、相互作用的に《ファルス》への欲望と、さらなる劣等コンプレックスが再生産されるサイクルが誕生するのである。

男性に排他的な性的関係を維持してもらうために、女性たちが多くの無償労働を捧げる第2の理

由は、多くの女性たちにとって性的承認と人格的承認が不可分と映ることによる。人格的承認は性的な親密性と不可分であり、《ファルス》の獲得がそこで可能であるかのような錯覚に陥ってしまうことが頻繁に起こりうるからである。すでに述べたように、ここでいう《ファルス》はフロイト流の解釈とは異なり言語による認識上の概念であるが、その出自がペニスに由来することにより、実際にペニスを使用する性行為によってもたらされる性的承認と混同・錯乱が起こりやすい。先に第3節で、《ファルス》はペニスそのものではなく、権力であるにもかかわらず、器官としてのペニスときわめて混同されやすいことが、女性にとっては事態をややこしくし、男性にとっては女性支配を容易にしていると指摘した理由はここにある。まさに《ファルス》はペニスに由来するがゆえに、性行為を通じて女性に欲望され、ペニスそのものと混同される。《ファルス》の獲得はすなわち特定のペニスの排他的獲得と混同されるのである。ペニスに象徴される《ファルス》は、まさにそれによって象徴されるがゆえに、ペニスによって実現され充足されると錯誤されるのである。この順序が逆転した認識は、いうまでもなく男性による（男性の《ファルス》による）女性の支配をのみ、容易にする。

このような場合、女性にとってペニスとは《ファルス》そのものであるから、女性たちはそのペニスが他の女性によって篡奪される可能性を極端に恐れることになる。すなわち男性の浮気への恐怖であり、モノガミーへの翼賛である。そして、モノガマスに男性に所有されることは、同時にホモ・ソーシャリティの制度的基盤を支えることにもなるのだ。これまた、男性にとっては女性を支配する環境が整うことを意味している。さらに言えば、女性が《ファルス》の獲得をモノガマスな性的親密性においてのみ可能と錯誤するのは、まさに《ファルス》がモノガマスな性的承認を前提としたホモ・ソーシャリティによって供給されているからに他ならない。それは、男性自身のホモ・ソサイエティへの参加条件としてのモノガマスな女性の“所有”という規範が生み出した

コードであり、そのコードが鏡像的に女性たちにも共有させられている、と考えるべきである。

5. “コビコビちゃん”と男性の“連携プレイ”

その結果、多くの女性たちは男性への強い執着に追い込まれることになる。彼氏あるいは夫という特定の親密な相手の、とくに性的な独占は、《ファルス》を渴望する女性個人にとっては死活問題となる。これは、女性の性的自立が自らのホモ・ソサイエティに対する参加基盤を揺るがせるものとして激しい感情を示す男性たちの反応と対をなすものであるともいえる。しかしながら、この一見同質に思える激しい執着の感情の場面においても男女の差は存在している。男性の場合、特定の女性の“所有”というホモ・ソーシャルな社会的基盤は、ホモ・ソサイエティにおける参加資格の証明（十分条件）ではあるが、異性愛者であるという参加資格（必要条件）そのものではない。異性愛者である＝社会的にオーソライズされた男性である、という参加資格は、異性愛者であること、すなわち女性を性的対象とする者であるという表明さえ受け入れられれば、実際に特定の女性を“所有”していなくとも（“所有”するというプロジェクトが未達成であっても）、一応は成立する。ホモ・ソーシャルな賞賛や羨望を受けることが叶わず、たとえ本人にとっては不満足であったにしろである。

しかし、女性の場合は事情が違う。その事態は、渴望している《ファルス》へアプローチする道が閉ざされるかどうかの瀬戸際を意味しているようにみえてしまうからだ。特定の性的親密性を共有する男性との、日常における違和感や性格の不一致を嘆く感情に比べて、相手が浮気をした際の、ときには致命的なまでに激しい感情や葛藤は、この《ファルス》の問題が絡んでいると解釈できるだろう（もちろんそれがすべての原因ではないにしても）。なぜなら、人格的承認とは親密性における承認と等価であると認識されており、ペニスと錯誤された《ファルス》へのアプローチこそが、彼女らの世界を支え、成り立たせている

ものと認識されているからだ。特定の男性との性的親密性の喪失を極度に恐れる心は、主にこの点に起因していると思われる。少なからぬ女性において、女性の自立やライフプランをたとえ頭では理解していても、実際に男性との親密性の局面においては、個別の男性の支配を受容し、ときには特定の男性のために自己犠牲さえ厭わないという、恐るべき“脆弱さ”が顔を覗かせてしまうのも、この世界観と深くつながっているからと考えられる。

それは、植民地支配下において、支配者が自分たちを見る視線を自分の中に取り込んで内在化し、彼らに教わり、彼らに支えてもらわなければ自分たちには何をする能力もないと信じてしまうことです。自分たちの社会や価値観に基づく評価は役に立たず、彼らの評価でなければ有効性がないという考えを持ってしまうことです。この問題はきわめてたちが悪く、奥深く浸透しているため、食い止めたり変えたりすることができるものかどうかさえ疑問です。(Said, 1994=1998: 207-208、傍点原文)

知的植民地支配について語ったこのサイドの言葉は、そこで語られている構造を考えたとき、両性間のコロニアリズムにも適応可能である。すなわち、男性との親密性から排除されることは、女性たちにとって、“世界”（それは《ファルス》によって形作られている）から排除されることでもあり、大袈裟にはなく、“世界”が崩壊することを意味している。多くの女性が男性支配を嫌い、自立を目指しつつも、その後の世界を想像できずに、自らの世界を変えることに躊躇するのは、このように《ファルス》を渴望している結果であり、それ以外の世界の在りようを想像することが、「《ファルス》世界」にどっぷりと浸かった精神には困難に感じられるからではないだろうか。その結果、女性たちは「愛」と呼ぶには強すぎる、むしろ「執着」と呼ぶべき感情に突き動かされ、結果として《ファルス》の秩序により強力

にからめとられてしまう。その意味で、《ファルス》を媒介とした女性への支配は、きわめてポストコロニアルな問題であると、再定義できるだろう。

しかも、《ファルス》に執着し、それを性的な回路を経て獲得しようと企図することは、同時に「異性愛者の女性」を自らの身体を使ってパフォーマンスに再生産することでもある。そして「異性愛者の女性」こそ、男性たちのホモ・ソーシャルな関係を成り立たせるために必要不可欠の存在である。自らの欠落、人格として認めてもらいたいという欲求（その欠落感も元をただせば《ファルス》によって生産されたものであった）を埋め合わせるために、親密性を求めることは、それが性的な回路を通じて行われるために、直接的かつ同時に異性愛制度を再生産し、異性愛者の身体を再生産することになる。ここに、女性たちは男性の女性支配の共犯者として、ヘテロセクシズム（異性愛的差別主義）に積極的に関与させられることになる。

そしてその結果、女性の多くは、男性に対して「媚び」を売らなくてはならないハメに陥る。自らの“世界”を《ファルス》への接近可能性によって維持しなくてはならないからだ。それを免れ得るのは、人格的承認を代替するまでに圧倒的な社会的承認を得られている女性か、特殊かつ独自の人格的承認を得る道を確認している女性に限られるだろう。いずれにしろ、夜空の星々から1つの星を選ぶにも等しい希少さである。

そのような状況下で女性が発動させられる「媚び」は、なにも性的な媚態に限らない。むしろ、性的なニュアンスを前面に感じさせる「媚び」は、それが性的承認を直接的に求めるサインであるがゆえに、「媚び」としての効果は低い。その欲望のありか（性的承認を通じた人格的承認）を男性たちに強く意識させるからである。繰り返すが、男性間のホモ・ソシヤリティを安定的に成り立たせるためには、女性が欲望を持つことは禁止されているのである。女性が承認への欲望を顕にすることは、男性間のホモ・ソサイエティにお

ける“戦利品”としての女性の価値を下げると同時に、それを“所有”する男性の価値をも下げかねないのである⁸⁾。

むしろ男性たちに喜ばれる「媚び」は、男性個人の言語的権力としての《ファルス》に関連したものである。男性たちは、支配者として自らが劣等コンプレックスを女性に植えつけてきたことを十分に承知している。したがって、彼女らの劣等コンプレックスに関連する部分、すなわち権力としての《ファルス》に関連する部分での「媚び」こそを歓迎する。そのような「媚び」が、彼ら自身の《ファルス》を再確認させ、ホモ・ソーシャルな参加資格を確認させるからである。言い換えれば、男性は自らのペニスに対してではなく、ペニスに象徴される《ファルス》に「媚び」て欲しいのである。そのような「媚び」こそが、劣等コンプレックスを抱えさせられた女性たちにとって、彼女らの独立性への欲望を自ら粉碎する行為であり、男である自分を羨み、男である自分に同化したいという従順さの現れとなることを、よく知っているからだ。

したがって、多くの男性たちは、自らの性的能力に対する「媚び」以上に、男性的な考え方、「男性性」、社会での達成度、自らの《ファルス》を成り立たせている諸要因、といったものに対する「媚び」に、より大きく反応する。そして、このような構造をこれまた十分に理解している女性たちは、「媚び」を売ることによって、その男性から性的に欲望されることを通じて、人格的に承認されたいと願ってしまうのである。

このような「媚び」を連発する“コビコビちゃん”はいたる所に存在するだろう。そのような存在を男性社会がうみだしているのだから。“コビコビちゃん”は露骨に性的な「媚び」は発動しない。性的な文脈で発動するのはここぞという局面のみである。むしろ彼女らは、日常的には男性のホモ・ソーシャルな資質に対して「媚び」を売るという戦略（おそらく無意識的に）を選択する。その「媚び」は、性的な文脈ではなく社会的承認や人格的承認にかかわる領域において発揮されなければならない。たとえば、本当は知っているこ

とでも知らないふりをして男性の知識の豊富さを称えたり、もともと理解している事象を男性の解説によって初めて理解できたふりをしたり、なにかを男性の示唆によって気付かされたり、発見できたふりをしたり、自分の悩みや苦しみが男性の言葉や行動によって救われたようなふりをしたり。それらは、一見したところ、良好なコミュニケーションや、ある種の啓蒙関係にすら思える情景である。それらは、言葉を使用して行われることもあれば、上目遣いや眼を見開いたり、はっとさせられたような表情、驚いた表情といった、ノンバーバル（非言語的）な表現を通じて達成されることもあるだろう。

いずれにしろ、そのような「媚び」は確実に男性たちを充足させ、満足感を与えるだろう。男性たちの存立基盤がホモ・ソーシャルな競合性に存在しているからだ。しかもそのような「媚び」は、意図的であれ無意識的であれ、長期にわたって繰り返されているうちに“コビコビちゃん”のパーソナリティの一部と区別がつかないほどハビトゥス化されてしまうだろう。そしてそのような“コビコビちゃん”が世の中に大量に存在していることは、ホモ・ソーシャルな価値観をより強固で揺るぎないものとして、男性たちに共有させる契機をさらに提供する。

しかし考えてみれば、“コビコビちゃん”が必死になって「媚び」を売り続けるのも、彼女らが劣等コンプレックスとメランコリーを深く内面化し、それを埋めるものとして《ファルス》を特定の男性による承認によって得ようと、もがいているからに他ならない。そのため多くの場合、“コビコビちゃん”は、容姿であれ、能力であれ、“優しさ”であれ、自身が欠落を意識している部分、自分が承認を得たいと思っている部分にかんして集中的に「媚び」を売ることになるだろう。“コビコビちゃん”とは、多くの女性たちに共有されている《ファルス》に対する“脆弱さ”、承認への欲求、無意識的な被支配の象徴的な存在である。したがって、その構造を無意識的にでも感じとっている“コビコビちゃん”は、その「媚び」が成功した暁には男性をより愛しより憎むことに

なる。その結果、ますます男性と女性を内面化し、その帰結としてホモ・ソーシャリティが強化されるのであれば、これは女性にとっていかに困難で不毛なプロジェクトであろうか。

一方でそのプロジェクトは、男性にとっても《ファルス》の維持のために必要なものである。このプロジェクトは、いうまでもなく、まずは父親によって開始される。父親は近親姦タブーと同性愛タブーによって、メランコリーを「女兒」に植えつける。そして、そのメランコリーがもたらす欠落感は、《ファルス》をもって埋め合わせるものであるとの価値観が、「父の法」たる《ファルス》によって命じられる。

「父の娘」において典型的にみられるように、《ファルス》を希求する心性を植えつけられた娘は、父を体内化し、《ファルス》に同一化しようとする。バトラーは近親姦を論じた文脈において、「近親姦のケースにおいては、彼ら自身の愛を搾取された (be exploited) 子供は、回復したり、愛を愛として素直に認識することが、もはや不可能になるかもしれない」、と論じているが (Butler, 2004: 159)、この構造は《ファルス》の受容についても相似的に当てはまっている。

「父の娘」が《ファルス》に惹かれてゆく契機は、父親からの承認を求めて「よい子 (娘)」であろうとする点にある。それは父の意に沿って承認されるための労働をも伴っており、子供の「愛＝労働」が付け込まれ、搾取されるということでもある。その意味でバトラーが子供自身の「愛」を搾取／利用されると記述していることは、近親姦を超えた一般的な文脈においても的確である。

言い換えれば、父親たちは、娘の「愛」を利用するために、自分を「愛」させるために、ミソジニーを植えつけ、母や女性の家族を軽蔑させ、疎外させ、女性を分断し、娘を「父の娘」に仕立て上げようと努めるのである。そしてそのような「愛」は、究極的には性愛 (における女性の従属) と無償労働の提供で表現されるものであるという回路を、娘の心に切り拓く。そのことが、ホモ・ソーシャルな利益を支えるものであることを

充分に知っているからである。

つまり「愛」の搾取という回路は、(近親姦のケースに限らず) 一般的な文脈においても女性の子供時代に拓かれているのである。そしてその回路は、父親からバトンタッチされた「彼氏」、「夫」といった次世代の《ファルス》の体現者によってフルに活用されることになる。男性への「愛」という名の不払い労働の提供と、《ファルス》への欲望に基づく男性への従属である。《ファルス》を希求する種子は父親によって蒔かれ、《ファルス》を継承し、女性への支配の流れ (系譜) を父親から接合した次世代の男たちの利益に貢献し、さらにその世代の男たちが彼らの娘に再び種を蒔くのである。

いわば、世代を超えて連綿と続く“連携プレイ”がそこには存在している。その“連携プレイ”は、無償労働としての「愛」と親密性の双方において継承され、そのいずれにおいても男性たちのホモ・ソーシャリティに貢献する。したがって、女性たちに《ファルス》の不在を認識させ、それへの欲望を生じさせ続けることは、「愛」の搾取を基盤とした男性の利益のためには、必要な戦略なのである。

6. 承認再考—小括に代えて

問題は、つねに《ファルス》に立ち戻る。ここまで考えてきたように、女性たちが人格的承認として《ファルス》を求めることが一般的に起きうる事態であるとして、それはあまりに達成可能性の低いプロジェクトであるといえる。

しかし、彼女たちの欠落は本当に《ファルス》でしか埋め合わせることができないのだろうか。ひとつの考え方は、やはり何らかの形で《ファルス》あるいは《ファルス性》が必要であるとするものだ。リュス・イリガライの「女性的に語る」という実践の概念 (Irigaray, 1977=1987) も大きくはこの系譜に属するといえるし、より直接的な言及としてはバトラーによる「レズビアン・ファルス」がその代表的なものであろう。バトラーは、《ファルス》を (身体的器官としての

ペニス以外のものにも) 転移可能な幻想と定義したうえで、「レズビアン・ファルスは、ファルスに別の様式で意味付けを行う機会を提供する。そしてそのような意味付けを通じて、ファルスのもつ男権的かつヘテロセクシズムな特権を、意図的ではなく、再度意味付けする」と述べている(Butler, 1993: 90)。バトラーのこの見解は、直接的には「男性性」と結びついた《ファルス》の解体可能性を説いたものである。しかし、メランコリーと《ファルス》の欠落の克服という視点から考えたとき、「レズビアン・ファルス」のようなものであっても、それが実現可能であるとしても、人格的承認という視点からは、たとえ形が変わっていても《ファルス》への同化の欲望がどの程度解消されるのかは、正直なところ不明である⁹⁾。

はたして人格的承認は、《ファルス》を通じてのみ、換言すれば言語権力の内面化によってしか、獲得不可能なのであろうか。たとえば、共感に基づく信頼関係、尊敬といった男性間にはホモ・ソーシャリティによって共有され、一方では女性間においては「美」をめぐる競争関係によって断ち切られがちであった関係、あるいは男女間においてはそもそも対等性が確立されなかったゆえにほとんど共有されなかった関係を、男女問わずに再考することは、夢に過ぎるであろうか。

考えてみれば、女性たちの多くにとって、これらの承認は人格的なものとして与えられることは稀であったといえるだろう。実際には、女性たちは男性に尊敬・共感・信頼といった価値承認と、性的な親密性を同時に求めてきた。それが性と愛が一致するという近代のロマンティック・ラブの核心でもあった。しかし実際には、本稿で考えたように親密性を通じた《ファルス》による権力支配がもたらされることがほとんどであった。その結果、さらに尊敬・共感・信頼等を求めて親密性の領域で男性を求めるという悪循環が発生し、結果として男性支配は強化されてきた。

しかし、女性たちの一部には別の考え方を採用している人も時折見受けられる。男女を問わず、尊敬・共感・信頼等は友人たちの間で獲得し、性

的親密性を共有する男性からは《ファルス》を通じた権力による承認のみを求める、という戦略である。わかりやすく言えば、精神的な人間関係と性的な関係をきれいに切り分け、それをリンクさせない戦略である。友人とは性的な親密性を持たないし、性的な親密性を持つ相手には精神的なつながりを求めない。

もちろんこのような戦略は、近代のロマンティック・ラブの観点からは批判されるだろう。繰り返すが、人格(愛)と性の一致がロマンティック・ラブの核心であるからだ。しかし、《ファルス》権力の強制力を考えたとき、この戦略はある程度までは適切であるようにも思われる。ただし、この戦略にはつねに危険が付きまわっている。とくに対男性において、そのような価値観が共有されていないかぎり、友人と思っていた男性個人がいつ親密性を求めてくるかわからないという点である。そしてその男性の友人個人がホモ・ソーシャルな価値観を内面化しているかぎり、親密性を共有した時点で、《ファルス》による支配は起動されてしまうだろう。

またこのような戦略の背景には、深い絶望が横たわっていることにも注意が必要である。ロマンティック・ラブが全盛である近代のこの時期に、このような戦略をあえて選択しているということは、尊敬・共感・信頼と性的な親密性が一致する可能性を事前に諦めているということの意味しているからである。

ロマンティック・ラブに代わる価値観の存在しない中で、ロマンティック・ラブに彩られた環境の中で、このような絶望にどの程度耐えられるか、という疑問が生じる。実際に、このような選択をしていた女性の中には、ある時点で絶望に耐えられなくなり、一極から他方の極へ振子が揺れるように、一気に《ファルス》の虜となってしまった人も少なからず存在していることが予想できる。この戦略には、そのようなリスクがつねに伴うだろう。

それでは、ありうる別の可能性はなにか。残念ながら、すべてを一度に解決するような解答は現

時点では存在していない。しかし、一つずつ問題を切り分け、問題点を確認することは、ある程度は可能である。まずは、それでもなお、尊敬・共感・信頼といった人格的承認の主要構成要素を、性と切り離して共有できる関係を模索することが重要であろう。その先に、性的な親密性が《ファルス》による支配を伴わない形で（再）結合するかどうかは、不明である。しかし、たとえ針の穴ほどの可能性であったとしても、可能性としてはこの順序しかありえないだろう。現状において性的親密性はほぼ《ファルス》の行使と同義であり、そのような関係性から尊敬・共感・信頼といった人格的承認の主要構成要素が導かれることは、論理的にもありえないからである。

一方で、男性における《ファルス》の活用、《ファルス》を通じた女性の搾取を停止させる必要があることは言うまでもない。世代を超えて受け継がれている《ファルス》の活用は、男性たちの利益、すなわちホモ・ソーシャルな利益の基盤でもあるからだ。しかし、言うのは簡単だが実行までの道のりは果てしなく感じる。しかしこのホモ・ソーシャルな利益の解体こそが求められる変化の焦点であり、克服しなくてはならない論点である。それはモノガミーと近代血縁家族制度を基盤とした国民国家システムの再考でもあり、近代性(modernity)を再考することにもつながるだろう。この点については、その問題の詳細な分析を含めて、稿を改めて考えたい。

さらにその先には、男女ともに《ファルス》を“断念”するための動機と、新たな親密性を構築するための枠組みが必要になるだろう。それは、性を権力から切り離し、国民国家のリプロダクションのシステムと切り離すことを意味する。そのためには、男女ともに新たな自己肯定や自己充足のための、新たな情報経路の開拓が必要になるだろう。本稿では触れられなかった論点である。

本稿は、池田(2008; 2009)で十分に論じきれなかった論点を中心に、《ファルス》の権力が現実の女性支配の側面において、どのような役割を果たしているのかを検討した。その克服の方策は、残念ながら現時点では未知であるが、問題を

切り分けて整理し、《ファルス》の権力作用とその克服を、今後のいくつかの課題として設定したことをもって、とりあえずの小括としたい。

注

- 1) この点は、公的領域において社会的承認を得にくい女性においては、より強い傾向となって現れることは言うまでもない。また、人格的承認、社会的承認、性的承認という区分の詳細については、池田(2008: 46-47)を参照されたい。
- 2) 植民地支配において、制度的支配以上に、精神面・心理面での支配が重要な意味をもつ点については、「心的傾向としての植民地主義」として問題化した(池田: 2005a, 2005b, 2006)。池田(2008)、池田(2009)、および本稿においても、この「心的傾向としての植民地主義」という概念を下敷きに議論を進めている。
- 3) たとえば、「悪女」についての男性の手による代表的評伝である澁澤龍彦の『世界悪女物語』(澁澤, 2003)には、ルクレチア・ボルジア、エリザベート・バトリ、ブランヴィリエ侯爵夫人、エリザベス女王、メアリ・スチュアート、カトリーヌ・ド・メディシス、マリー・アントワネット、アグリッピナ、クレオパトラ、フレデゴンドとブリュヌオー、則天武(后)、マгда・ゲッベルス、の13名がリストアップされている。
- 4) 現在では「ジブシー」という語は不適切な表現で、ロマ民族と表記すべきであるが、ここではメリメの原作の表記に従った。
- 5) 本稿を執筆中の2010年9月にも、厚生労働省の元局長の、虚偽有印公文書作成・同行使罪事件の無罪判決(大阪地裁)が連日報じられていた。しかし、この局長が女性であったことから、多くの報道においては「女性キャリア」、「女性局長」等の表記が溢れていた。同種の事件において「男性キャリア」、「男性局

- 長」等の表記が皆無であることを考えれば、公的領域の象徴である官僚界における女性の希少性を示すこの表現は、女性が社会的承認を少なくとも男性と同等に獲得することの困難さ、珍しさを象徴していると思われる。
- 6) バトラーおよびバトラーの議論を整理したサリーは、《ファルス》は、転移可能な幻想、象徴的効果であると定義している (Butler, 1993 : 81 ; 86 ; 88 ; Salih, 2002 = 2005 : 153)。
- 7) ちなみに、この業績原理と女性原理の双方において父親の期待に応えようとする態度は一人の娘の中に両立しうる。その結果、業績原理を内面化すればするほど自分と他の女性へのミソジニーは強化され、一方で女性原理を内面化すればするほど母親や他の女性家族と「父の愛」(それは多分に性的なニュアンスを含んだものにならざるを得ない)をめぐって競合関係が激しくなる。その結果、とくに、ただでさえ複雑な母娘の関係は、より複雑で愛憎が絡むものとなり、それが家庭内における父親の支配権を翼賛する結果となりうる。このような母娘の分断がもたらす権力作用については、田嶋(1986 : 7)に詳しい。
- 8) もちろんその理由以外にも、性的なニュアンスを含む「媚び」を発動する女性は、男性にとって独占的所有への確信を揺るがせる存在でもある。すなわち、自分以外の男性にも同様な態度を取っているのではないか、という疑念が、男性文学等においてみられるひとつの類型としての「好き者な女」を連想させるからである。
- 9) とは言っても、本稿はバトラーの議論を全面的に批判するものではない。現に《ファルス》が現在の形で存在しているかぎり、《ファルス》の権力は存在し続けており、それを何らかの形で異化しないかぎり、《ファルス》の権力作用を押しとどめることは困難であることは現実的な課題である。《ファルス》の存在が強大であるかぎり、それを転換・異化させるためのあらゆる方策は模索さ

れるべきであり、バトラーの「レズビアン・ファルス」という概念も、その方策の一つとして十分な存在意義を持っていることに異議はない。それは人格的承認と《ファルス》の鎖を断ち切る一つの方法となりうるかもしれない。しかし、それらの可能性を十分に評価したうえでなお、《ファルス》に表象されてきた言語的なジェンダー上の権力の回路が、完全には閉ざされない危険性を考えておく必要があると思われるのである。

参考文献

- Butler, Judith 1990 *Gender Trouble : Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge, (竹村和子訳 1999『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』) 青土社
- Butler, Judith 1993 *Bodies That Matter : On the Discursive Limits of "Sex"*, Routledge
- Butler, Judith 2000 *Antigone's Claim : Kinship Between Life and Death*, Columbia University Press, (竹村和子訳 2002『アンティゴネーの主張—問い直される親族関係』) 青土社
- Butler, Judith 2004 *Undoing Gender*, Routledge
- Dalla Costa, Giovanna Franca 1978 *Un lavoro d'amore*, (伊田久美子訳 1991『愛の労働』インパクト出版会)
- Fanon, Frantz 1951 *PEAU NOIRE, MASQUES BLANC*, (海老坂武, 加藤晴久訳 1998『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房)
- Foucault, Michel 1975 *SUR VEILLER ET PUNIR : NAISSANCE DE LA PRISON*, (田村俣訳 1977『監獄の誕生—監視と処罰』新潮社)
- Foucault, Michel 1984 *L'USAGE DES PLAISIRS*, (田村俣訳 1986『性の歴史II 快楽の活用』新潮社)
- Giddens, Anthony 1992 *The Transformation of*

- Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Society*, Polity Press. (松尾精文, 松川昭子訳 1995『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房)
- 池田緑 2005a「心的傾向としての植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察Ⅰ—」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要—社会情報系—)』14: 55-77
- 池田緑 2005b「平等, 寛容, 想像力, そして植民地主義—植民地主義をめぐる基礎的考察Ⅱ—」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要—社会情報系—)』14: 79-99
- 池田緑 2006「おばけは生まれ変わることができるか?—植民地主義をめぐる基礎的考察Ⅲ—」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要—社会情報系—)』15: 15-38
- 池田緑 2008「承認の政治における男性権力—モノガミーと性愛の植民地主義への基礎的考察—」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要—社会情報系—)』17: 43-61
- 池田緑 2009「親密性の権力と植民地主義—性愛と権力にかんする基礎的考察—」『社会情報学研究 (大妻女子大学紀要—社会情報系—)』18: 45-66
- Irigaray, Luce 1977 *CE SEXE QUI N'EN EST PAS UN*, Minuit, (棚沢直子, 小野ゆり子, 中嶋公子訳 1987『ひとつではない女の性』勁草書房)
- 鹿島茂 2003『悪女入門—ファム・ファタル恋愛論』講談社現代新書
- 桐野夏生 2006a『グロテスク (上)』文春文庫
- 桐野夏生 2006b『グロテスク (下)』文春文庫
- 野村浩也 2005『無意識の植民地主義—日本人の米軍基地と沖縄人』御茶の水書房
- 小倉千加子 2001『セクシュアリティの心理学』有斐閣選書
- Said, Edward.W 1994 *The Pen and the Sword*, Common Courage Press, (中野真紀子訳 1998『ペンと剣』クレイン)
- Salih, Sara 2002 *Judith Butler*, Routledge, (竹村和子訳 2005『ジュディス・バトラー』青土社)
- Sedgwick, Eve. K 1985 *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press, (上原早苗・亀澤美由紀訳 2001『男同士の絆—イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会)
- 澁澤龍彦 2003『世界悪女物語』文藝春秋
- 竹村和子 2002『愛について—アイデンティティと欲望の政治学』岩波書店
- 田嶋陽子 1986「父の娘と母の娘と」鷺見八重子, 岡村直美編『現代イギリスの女性作家』勁草書房: 1-24
- 田中貴子 1992『<悪女>論』紀伊国屋書店
- 上野千鶴子 2010『女ざらい—ニッポンのミソジニー』紀伊国屋書店

Politics between recognition and intimacy ; From the viewpoint of colonialism

IKEDA MIDORI

School of Social Information Studies

Abstract

In the present day, men's domination over woman is done through a "phallus" symbol. Heterosexism raises melancholy within women, and the desire of the "phallus" is planted in woman to compensate for melancholy. Women who try to assimilate into a "phallus" will support men's domination further via sexual intimacy. In this paper, I will examine some aspects of the politics developed between recognition and intimacy from the viewpoint of the "phallus".

Key Words (キーワード)

gender (ジェンダー), sexual love (性愛), recognition (承認), phallus (ファルス), intimacy (親密性), homo-sociality (ホモ・ソーシャリティ), romantic-love (ロマンティック・ラブ), colonialism (植民地主義)